

令和2年漁期 イカナゴ新仔（シンコ）情報

令和2年2月17日
香川県水産試験場

1 気象・海象

(1) 日平均水温（図1）

今期の屋島湾（備讃瀬戸）の日平均水温は、11、12月は平年値（H1年度-H30年度の平均値）より1.1℃程度高く、1月以降は2.4℃程度高く推移している。2月6日発表の気象予報（高松地方気象台：<http://www.jma-net.go.jp/takamatsu/>）によれば、四国の今後1ヶ月の気温は1週目から4週目まで「高め」と予想されている。従って、今後の水温は「高め」で推移すると思われる。なお、イカナゴの産卵盛期の水温とされる14～12℃になったのは、12月23日～1月10日で、平年（12月14日～12月26日）と比べ9日遅く、6日長かった。また、夏眠終了が本格化すると推測されている水温13℃を下回ったのは1月2日で平年より14日遅かった。

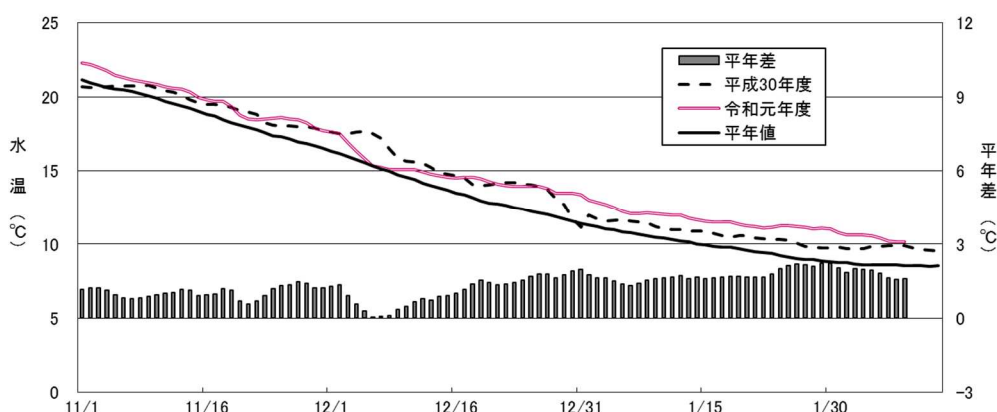


図1 日平均水温の推移（屋島湾水深1.5m）

(2) 季節風（図2）

季節風（特に西風成分）の強弱は、備讃瀬戸から播磨灘に運ばれるイカナゴ仔稚魚の量を左右し、風が強いと分散が良く生残も良くなる傾向がある。12月以降の旬別平均風速（西風成分※）は、12月は「やや弱め」から「著しく弱め」、1月以降は「平年並み」から「やや弱め」で推移している。なお、ふ化は1月中旬頃から本格化したと考えられる。

※時間毎の風向データを西成分を1とする西-東成分に変換し、それに風速を乗じた値を平均して求めた（東成分は除く）。平年値：H16年度-H30年度の平均値。

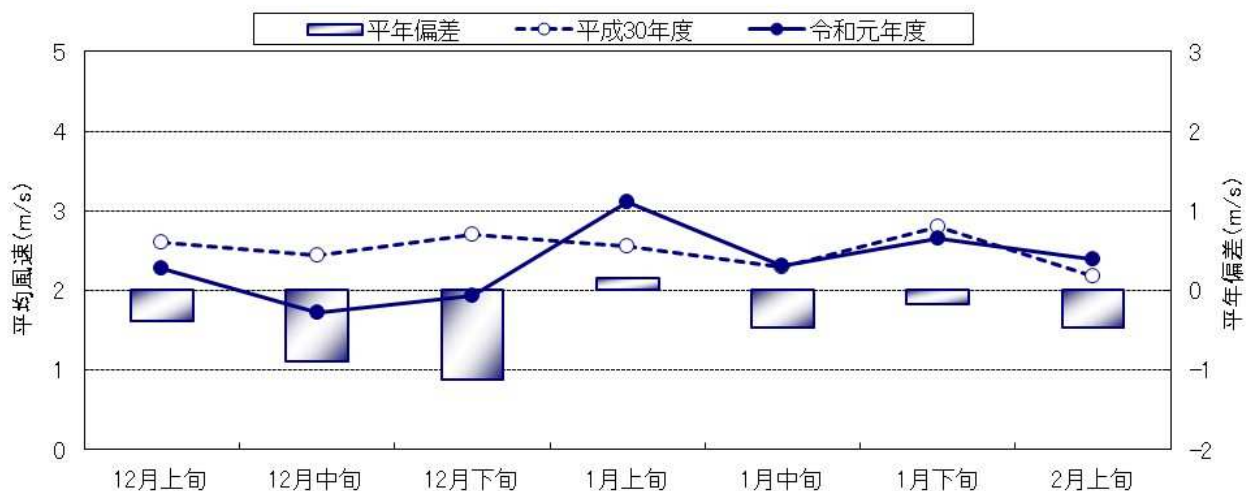


図2 平均風速（西風成分）の推移（高松地方気象台）

2 親魚調査

(1) 親魚密度 (図 3, 表 1)

令和元年 12 月 6 日 (1 回目), 19 日 (2 回目) の計 2 回, 高松～庵治地先において空釣こぎによる親魚調査を実施した。速力 3～5 ノットで 1 地点 5 分びきを原則 3 回ずつ 5 地点 (図 3) において実施した。親魚密度 (空釣こぎ 1 回あたりの採集尾数) は 4.6 尾で, 昨年 2.7 尾よりやや増加した。

年齢組成は 1 歳魚が 93.1%, 2 歳魚以上が 6.9% と 1 歳魚主体であった。なお, 平均全長は 1 歳魚 86.2 mm, 2 歳魚以上 141.5 mm で, 1 歳魚, 2 歳魚以上ともに昨年を大きく下回った。

* 1 歳魚: 平成 31 年 1 月 1 日生まれを示す。

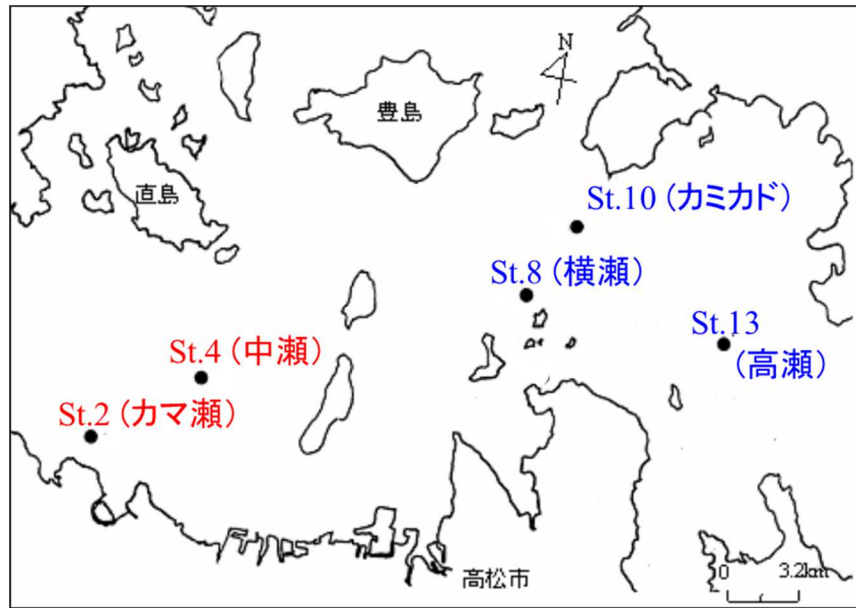


図 3 調査定点

表 1 親魚密度 (空釣りこぎ 1 回あたりの採集尾数)

		1 歳魚			2 歳魚以上			全体
		親魚密度 (尾/回)	割合 (%)	全長 (mm)	親魚密度 (尾/回)	割合 (%)	全長 (mm)	親魚密度 (尾/回)
今年度	夏季	5.3	98.7	84.4	0.1	1.3	140.7	5.4
	冬季	4.3	93.1	86.2	0.3	6.9	141.5	4.6
昨年度	夏季	0.9	91.7	97.0	0.1	8.3	166.3	1.0
	冬季	2.6	95.7	100.4	0.1	4.3	153.4	2.7

(2) 産卵期 (図 4)

1 歳メス親魚の生殖腺熟度指数 (GSI (%)) = 生殖腺重量 ÷ 体重 × 100) の推移を図 4 に示した。GSI は, 高松地区, 庵治地区ともに 12 月 6 日から 19 日にかけて増加した。なお, 2 歳魚以上は, 採集尾数が少ないためグラフには掲載していない。

生殖腺の成熟状況および水温の動向から, 今年の産卵盛期は昨年と同程度で, 12 月末～1 月上旬であったと推測される。

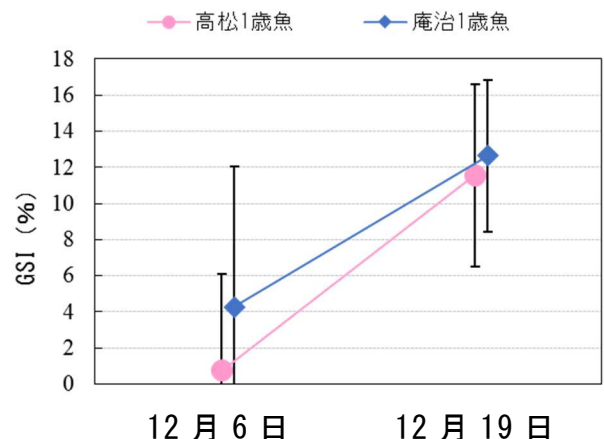


図 4 1 歳メス親魚の GSI の推移

(3) 産卵量

親魚調査および2月6日から実施されている込網におけるイカナゴ親魚の漁獲状況（4月上旬までのイカナゴの漁獲状況を参照）から、親魚量、産卵量ともに少ないと予想される。

3 仔稚魚の出現状況（図5）

備讃瀬戸3定点および播磨灘3定点の計6定点で1月後半（21日）、2月前半（4日）の2回、ボンゴネット（口径60cm）の往復傾斜びきを実施した。2回の調査を通じ、仔稚魚は今年の1割程度しか採集されていない。

(1) 1月後半調査（1定点あたりの平均仔稚魚数）

備讃瀬戸は23尾（平均全長5.6mm）で、播磨灘が平均5尾（平均全長6.8mm）であった。昨年は備讃瀬戸が平均196尾（平均全長4.7mm）、播磨灘が平均25尾（平均全長4.8mm）であった。

(2) 2月前半調査（1定点あたりの平均仔稚魚数）

備讃瀬戸が平均3尾（平均全長11.8mm）、播磨灘が平均1尾（平均全長16.6mm）であった。昨年は備讃瀬戸が平均20尾（平均全長8.5mm）、播磨灘が平均10尾（平均全長11.3mm）であった。

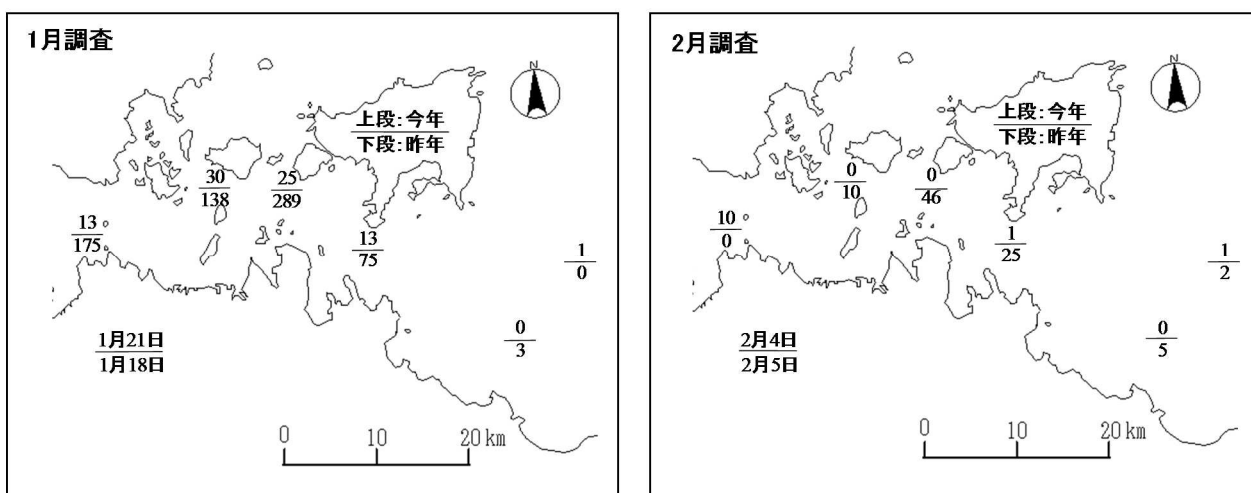


図5 イカナゴ仔稚魚の採集数（ボンゴネット面積1平方mの水柱あたりの尾数）

4 2月上旬までのイカナゴ（親魚）の漁獲状況（いかなご込網漁業）

高松 資源管理のため1月中は休漁し、2月6日から操業を開始した。2月15日までの漁獲量は約2トンと低調である。

庵治 2月10日から込網漁を開始したものの親魚、シンコともに少なく、資源管理のため2月12日から19日まで休漁予定である。

5 まとめ

親魚調査および親魚の漁獲状況から、親魚量および産卵量は平年より少ないと推測される。また、水温動向から仔稚魚の成長は良いものの、採集尾数は昨年よりかなり少なく、季節風の状況等から仔稚魚の分散状況も悪いと考えられる。

近年、イカナゴの不漁が続いている。イカナゴを取り巻く環境は、高水温や貧栄養など厳しい状況にあるが、今出来ることは来漁期に向けて親魚を残すことである。資源量の少ない状況での漁獲は、資源の減少に追い打ちをかけると考えられるため、操業に際しては小さいうちに獲らない、終漁を早めるなど格段の配慮が必要である。

【参考資料】

国立研究開発法人水産研究・教育機構 瀬戸内海区水産研究所は、備讃瀬戸の広い範囲で親魚調査及び仔稚魚調査を実施している。詳細については、ホームページに掲載されている次の情報も参照されたい。

親魚調査結果（<http://feis.fra.affrc.go.jp/ikanago/H30shingyo.pdf>）

仔稚魚調査結果（<http://feis.fra.affrc.go.jp/ikanago/H30shichigyō.pdf>）

※水産庁委託事業「我が国周辺水産資源調査・評価推進事業」の一環で実施。